

## 続 アフガン・パキスタン国境を行く 27

### 新谷絃一県議の報告

地球にはさまざまな生き方

最後の夜 神経涸れ思いは巡る

前回では、アフガン・カブール空港で、タリバン政権を打倒した北部同盟の一団との交流について語ってくれた。その後はどうだったのか。

新谷絃一県議 待合室や滑走路周辺で、さまざまな体験をしている間も、国際治安維持軍のヘリコプターが離発着を繰り返していた。

案内があり、搭乗することになった。空港のドアを出た所で、あらためて搭乗チケットの確認を受けた。ポスターをプレゼントしてくれた背広姿のおじいさんも見送ってくれた。そのおじいさんは、タジク人北部同盟の幹部かもしれない。もう一度訪問する機会があれば、先ほど撮影した写真を届けてあげたいと思った。

乗客は「カブール母と子の診療所」オープンに関係した十一人と合わせて二十数人いる。私たちが乗る飛行機は、よく見るとアリアナ航空である。昨日はパキスタン航空という話だったが……。いずれにせよ、空の便でアフガン・カブールを離れることはありがたい。ただ、パキスタン航空の場合、離陸する前は必ず、儀式としてコーランの祈りが機内のスピーカーから流れてくるが、アリアナ航空では、それがなかった。

機内からカブール空港を眺めたが、待合室周辺で見たのと異なり、民間機も二、三機止まっていたり、管理は行き届いていないが、思ったよりも広く感じた。搭乗者が一割にも満たない

ため、機体重量が軽い。そのせいか、スムーズに離陸した。初めて見る空からのカブール市内は樹木や緑、立体感がないものの、整然と区画された街並みが続いていた。古い都である中国の西安や、奈良の平城京のように、一直線に延びた道路など条里制をほうふつとさせていた。

約二十五年にわたる爆発や戦い、テロ報復で破壊されたが、繁栄のいったんをうかがうことができた。爆撃の跡は、土とレンガを主体にした住まいのためかもしれないが、焦土と化したカブールは残念だが、空からも廃虚の街に映る。



機内から緑と潤いのあるパキスタン・ペルシャワルの街を眺める

約二十年前に南米ペルーのクスコに行ったことがある。アンデスに栄えた海拔三〇〇メートルに位置するインカ帝国の都、クスコの街は、日ぼしレンガと土で造られた家が崩れ、その荒れように目を見張ったことを覚えている。カブールにしても栄枯盛衰、破壊と復興、栄え続けることの難しさを痛感せざるを得ない。



アフガン・カブール市内で爆撃を受けたバス

赤茶けた岩石が続くなか、山間にカブール川源流であろう点々としながら筋状に続いている川や、大小濃紺の湖があった。アフガンとパキスタンの国境ヒンドークシ山脈を横切り、カブール川がインダス川に合流しているペルシャワルは緑が豊かだった。二〇〇二年一月に訪問したとき、緑が少なく、ほこりっぽく、空気が乾燥していたパキスタンだったが、アフガンからすれば夏の今、空からのペルシャワル一帯は、潤いのある大地だった。フライト時間約一時間四十分で、パキスタンに着いた。現地時間は午後一時だった。

パキスタンから、同行のメンバーや他の県議らとともに旅行社の事務所に集合した。一同、木滝を成しとげた満足感と、無事故であったことを喜び合った。イスラマバード午後二時三十分発で飯田、奥山両県議はバンコク経由で帰国の途につかなければならない。ほっとする間もなく、二人は空港に向かった。

私は午後十時五十五分発、北京経由で帰国する。旅行社の事務所に残り、一時間あまり打ち合わせをする。九月二日の夜に泊まったパール・コンチネンタル・ホテルで出発するまで休憩することにした。

最後の夜、一人になった心細さと、同時に疲労感があったが、いまだに神経は冴(さ)え、遠い国であるのに、世界は狭く近くなったことの実感と、一方で地球にはさまざまな人々の行き方があるものだと思いを巡らしていた。

= 随時更新